The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新撰姓氏録を讀みて
Author(s)	貝田, 四郎兵衛
Citation	懐徳. 1929, 7, p. 62-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

清少納言枕草子を模したといふ此書の興味は、むしろ諧謔にあるので、枕草子の如き透徹犀利なるエッセイには比すべきものでない。

要するに雲林院荒廢の漠然たる年代は上述の如く推定し得るが、其廢寺の原因は未だ資料に接せず模糊として把捉するに由もない。

新撰姓氏錄を讀みて

貝田四郎兵衛

吾人の祖先は、上古姓氏を備へないものが大部分であつた。而して姓氏は必ず名族に限られてゐた。書紀に姓氏の初めて見ゐるのは、物部氏、(垂仁紀二六年)、大伴氏、(景行紀四〇年)、中臣氏、(仲哀紀九年)などで、此の頃でもまだ姓氏をそなへないで、單に某氏の祖と記した人名が多くある。然るに仁德紀の頃になると、何時の間にか姓氏の具つた人名が出來た。允恭紀の頃には姓氏が混じて稍々もすれば、天下の秩序が亂れやうとしたので、之を糺明せられる必要が生じ、紀元一〇七五年、天皇の四年に盟神探湯(クガタチ)を行つて姓氏を正されたその後、世移り時變り姓氏はますます紊れた。姓氏錄上表に「甲姓聯レ衡、枝葉寔繁、派流彌衆」とあるのはその當時の狀態をよく現はしてゐる。加ふるに奈良朝を經て、平安朝初期にかけては、朝鮮、支那から歸化した人々が益々繁殖して、何れが何れとも判ち兼ねる樣になり、姓氏錄編纂の必要にせまられた。姓氏錄の序文に「萬方庶民、陳二高貴之枝葉一、三韓蕃賓、稱二日本神胤一、時移人易、罕二知而言一、寶字之末、其爭猶繁、仍聚二名

儒」、撰「氏族志」、」とあるはこの事實を明確に物語つてゐる。そこで嵯峨天皇の弘仁六年、萬多親王は藤原園人、藤原緒嗣、阿倍眞勝等と共に一千一百六十二氏、目をあはせて三十一卷をたてまつられた。その苦心の一通りでなかつた事は、「譬如「窺」井談」星、取」蠡議」海」といつてあるのによつて明かである。今皇學叢書第四卷新撰姓氏錄によつて計算して見ると、大體左の通りである。

天神(高天原の神々の子孫)

左京六〇　右京三六　山城三二　大和二三　攝津二四　河內四七　和泉四三　計二六五

天孫(天祖以後の神代に皇室から派別したもの)

左京二〇　右京二二　山城一一　大和一四　攝津一三　河內一三　和泉一六　計一〇九

地祇(大八州土著の神々の子孫)

左京二一　右京七　山城二　大和七　攝津八　河內三　和泉一　計三〇

諸蕃(朝鮮支那から來たもの)

漢人の末

左京三九　右京四四　山城九　大和一一　攝津一三　河內三六　和泉一一　計一六三

百濟人の末

左京一四　右京四六　山城六　大和六　攝津九　河內一五　和泉八　計一〇四

高麗人の末

左京一五　右京九　山城五　大和六　攝津三　河內三　和泉〇　計四一

新羅人の末

左京一　右京三　山城一　大和一　攝津一河内一　和泉一　計九

任那人の末

左京三　右京〇　山城一　大和二　攝津三　河内〇　和泉〇　計九

諸蕃計三二六（全體の約三分の一）

その他雜姓　一一八

總　計　一一八二

これによつて諸蕃が如何に多かつたか、また如何に當時の朝野に勢力を有して居つたかを充分窺知することが出來る。古語拾遺にも「秦、漢、百濟内附の民、各々萬を以て計ふ、まことに褒賞すべし」とて、その數の多きを述べてゐる。今その重なものを左に擧げてみると、

漢族

〇太秦公宿禰（ハタノキミスクネ）　秦始皇帝の子孫融通王（弓月君）は、應神天皇の十四年百二十七縣の百姓を率ゐて歸化した。そこでこれらを諸郡に頒ち、蠶を養はしめ絹を織つて、これを貢がしめられた。

〇大蔭忌寸（オホヒカノイミキ）　魏文帝の後裔で、雄略天皇の御世四衆を率ひて歸化した。神護景雲三年大蔭忌寸の姓を賜つた

〇和藥使主（ヤマトノクスシノスグリ）　吳國主、照淵孫智聰より出てゐる。欽明天皇の御世、大伴佐豆比古（サデヒコ）に隨ひ、内外典藥書、明堂圖等六十四卷と佛像一軀、伎樂調度一具等を持して入朝した。考德天皇の御世牛乳を獻じたので、姓を和藥使主と賜ふた。

百濟族

〇調連　百濟の努理使主の後であつて、應仁天皇の御世歸化した。顯宗天皇の御世、蠶織して絁絹を献じ、

調の首の姓を賜ふた。

高麗族

○長背連（ナガセノムラジ）　欽明天皇の御代、衆を率ゐて歸化した。容貌美麗體格偉大であつて、且つ其背が長かつたから長背王と賜つた。

漢族

○秦忌寸（ハタノイミキ）　太秦公宿禰と同じく　秦始皇帝の後である。應仁天皇の十四年來朝し百二十七縣の狛姓（ダイ）を率ひて歸化し金銀玉帛其他種々の寶物を献じたので、天皇は之を嘉し給ひ、大和朝津間（アサツマ）の腋上（ワキガミ）に地を賜ふた仁德天皇の御世姓を賜ふて波陁（ハタ）といつた。子孫は蠶を養ひ、絹を織り、我國產業の發達に一大貢献をした一族は非常に富みさかへ餅の的を射たと云ふ傳說を殘してゐる。後に桓武天皇が都を京都にさだめ給ふた時、その費用の大部分を献上したのも秦氏であると云ひ傳へてゐる。秦氏はまた伏見の稻荷神社と因緣深く、もと稻荷の地には秦氏の祖神を祀つてあつたとの傳へもある。故に稻荷の神官には代々秦氏がなつた。かの有名な國學者荷田春滿ももとは同社の神官であつた　今京都近郊の太秦廣隆寺を訪れて、その寶物を拜觀せば、當時如何に榮へたかを充分に窺ふことが出來る。

これらの諸蕃が全國に蕃殖し、位置に於ても、富に於ても、朝野に重きをなした事は、前に述べた通りであるが、そればかりでなく早く大和民族と同化せんとして、盛に系圖を作り、祖先は日本人であるかの樣に見せやうとした。そしてひろく在來の大和民族と結婚し、全く混血の狀態になつた。これらはよく日本の民族意識を表明して居り、よく諸蕃をして日本精神に同化せしめたことが明瞭である。更にこれらの實狀を國史に徵して見れば、一層明かになる。桓武天皇の御母は光仁天皇の夫人高野皇后で、その祖は百濟の武寧王であ

り、神功皇后の御母葛城高顙媛（カツラキタカヌカヒメ）は新羅系の祖を有してゐられる。萬葉詩人である田邊史福麻呂は漢族であり、勅を奉じて日本紀を撰修した菅野眞道は百濟系であつた。かの名な意見封事を上つた三善清行も。百濟系の學者であり、平安時代の女歌人赤染衛門は支那系の祖をもつてゐる。文官として朝廷に任へた中納言和家麻呂は、桓武天皇の外戚で百濟系であつた。尙武人の中には隨分功勞のあつた人々がゐる。その代表的である坂上氏は、苅田麻呂のとき道鏡の奸計を告げ、惠美押勝の亂を平げ、甲斐守下總守陸奥守鎭守府將軍左京大夫となり、その女は桓武天皇の妃となつた。その子田村麻呂は忠勇無双の名將で、蝦夷征伐で有名なことは何人もよく知るところである。藤原純友の亂を平げたとき功のあつた大藏春實、女眞の入寇に拔群の勇をあらはした大藏種村なども、漢族であつた。その他田道間守は新羅系の天日槍（アメノヒボコ）の子孫で垂仁の朝、常世國に非（トヒ）時香菓（シクノカクノコノミ）を求めた忠愛の情は書紀をひもとく者をして、惻々として人を動かす感をいだかしめる。又仲哀天皇の西征の時五百枝の賢木に瓊（タマ）、鏡、劒の三器をかけ、之を献げて奉迎し奉つたと云ふ築紫の伊覩縣（イトノ）主の祖五十迹手（ソトテ）も新羅系であつた。仁德天皇崩じ給ひ、仲皇子が亂を起し、皇太子の坐す難波宮に火を放つたとき、密に太子を出し奉り、馬を進めて難を大和に避け參らせたのは、倭漢直の祖阿知使主であつた。欽明天皇　二十三年新羅に出征した我が軍が敗北したとき、調吉士伊企難（ツキノキシイキナ）の一族は難に殉じて、壯烈な忠君愛國の死を遂げた。この伊企難は百濟系である。蘇我氏滅亡の際に天皇紀、國紀、珍寶を悉くやかれたとき、火中より國紀をとり出して、中大兄皇子に奉つた船史惠尺（フネノフヒトエサカ）は百濟系であつた。その他工藝方面に盡した人々はあまりに多くて一々枚擧にいとまがない。

これらを綜合して考へると、姓氏錄の三分の一をしめてゐる諸蕃が、よく、皇室に奉仕して、その恩德に感激し、夙に日本魂の精粹を發輝したことが明かである。實に我文化史、政治史、工藝史等に重きをなすは諸蕃

であり、諸蕃のなしとげた功績を我國史からとり去れば、眞に寂寥の感をいだくであらう。而して他面から論ずるときは、これらは實に我皇國の包容力、同化力の偉大なことを示すものと云ふべきであつて、これ實に我國體の精華である。飜つて思ふに維新以後、我領土は益々擴大され、上世より常に我國史の問題となつてゐた朝鮮が、我に內附してから早くも二十年に垂んとしてゐる今日、朝鮮の統治は表面如何にも立派に行屆いてゐるが、彼等鮮人のことごとくが、眞に衷心より、よく我皇恩に感じてゐるであらうか。未だ朝鮮に一歩も印せぬ吾人には到底かゝる点まで知る由もないが、萬一朝鮮に於ける國民教育が、諸蕃の功績を知らしめ、之を同化せしむることを閑却してゐたとすれば、決して眞一「內鮮融和」を望むことは不可能である。國史を愛好し、國史を讀むの士はすべからくかゝる点に留意して、新領土の同胞を同化すべきではないかと思ふ。

拙堂先生の楠氏研究

今西茂喜

(一)前南朝の史實に關しては、今日已に盛んに論議せらるゝ雖も、千載の下、痛哭長大息すべき　後龜山帝の龍種の御最後の哀史を看過し去るは、研究家の態度として甚だ遺憾無き能はず、此史實に就き拙堂齋藤先生は、敬虔の態度を以て謹嚴の文字を驅使し、後南朝遺蹟碑記(拙堂文集一卷)と題して其の意見を發表せらる、其の一節に曰く、